

## 限界集落で暮らし続ける独居高齢者の心理的な強さとコミュニティ

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター  
村上 佳栄子

本研究は、限界集落で暮らし続ける独居高齢者の心理的な強さとコミュニティの関連性について探究し、対象者の心理的な強さの形成過程を通して、土地での暮らしを持続する支援の方向性を検討することを目的とした。

X市のY地区における限界集落の3集落を対象地域とし、平均年齢85±7.6歳の独居高齢者5名（男1・女4）を対象に半構成的インタビュー調査を実施し、Grounded Theory Approachを用いて分析をした。

分析の結果、“生活の中で培ってきた適応力”、“自立と依存のバランス”、“生きるための健康観”、“地域でのつながり”、“支え継承したい故郷”、“最期までこの土地で暮らしたい思いと現実との葛藤”の6つの大カテゴリが抽出された。いずれも対象者を支える心理的な強さであると特徴づけられる。

また大カテゴリの構造化より以下のことが明らかになった。心理的な強さは、コミュニティと関連しながら“生活の中で培ってきた心理的な強さ”、“個々の経験の中で培ってきた心理的な強さ”、“核心となる心理的な強さ”を経るプロセスの中で形成されていた。

コミュニティで形成された心理的な強さは、限界集落で暮らし続けるために必要とする適応力・生活力・持続力をもたらしていた。さらに対象者は、コミュニティを通して“コミュニティへの対象者の思い”育んでいた。これは、世代継承したい思いの特徴であり、この思いが心理的な強さをより一層支えていることが示唆された。

対象者の生活を支え、維持するために、この土地で培われてきた心理的な強さを尊重し、対象者が出来る限り自立を維持できるための健康支援とコミュニティとのつながりを生かした支援が求められる。たとえ土地を離れたとしても、コミュニティと心理的なつながりを持つことが重要となる。

この土地で培われてきた心理的な強さは、限界集落での暮らしを持続可能とする力でもあり、生きていく支えとなる強みでもある。離れた土地においても対象者のQOLを保持するために必要な強さであるといえよう。